

集会樹にみられる宗教実践とイメージ

森 雅 秀

The Relationship between Religious Practice and Image in “Assembly Tree”
(*tshogs shing*)

Masahide MORI

金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇

第23号 別刷

Reprinted from
Studies and Essays, Behavioral Sciences and Philosophy
Faculty of Letters, Kanazawa University
No.23, p.63–98, 2003. 3.

集会樹にみられる宗教実践とイメージ

森 雅 秀

The Relationship between Religious Practice and Image in “Assembly Tree”
(*tshogs shing*)

Masahide MORI

1. はじめに

チベット仏教美術の中にツォクシン（集会樹）と呼ばれる絵画のジャンルがある。画面全体に巨大な樹木を描き、その中央には特定の尊格や宗派の開祖のラマをおく。これを取り囲むように仏、菩薩、女尊、忿怒尊などのさまざまな尊格が描かれる。樹木の上方には雲がたなびき、その中にはインドやチベットの高僧や祖師たちが整然と並ぶ。祖師の姿は樹木の部分にも描かれる。画面の最上部中央には法身が位置することも多い。また樹木の下には、雲に乗った四天王や護法尊が置かれる。

ツォクシンを理解するためにはそれを支配している原理を知らなければならない。そのひとつは、インド以来の仏教の伝統が、各派の祖師へと至る流れ、すなわち血脈である。これは歴史的な時間の流れでもある。尊格の集合体であるパンテオンについての知識も必要である。ツォクシンの中央の人物や尊格のまわりに広がる尊格の帯は、尊格のヒエラルキーを反映し、高位の尊格ほど中央に近く位置する。四天王が樹木に乗らず、その下（実際は周囲）におかれるのは、護衛という彼らの役割による。

チベット仏教の各宗派はそれぞれ異なる開祖を持ち、主要な仏も異なる。そのため各派は固有のツォクシンの図像を持っていた¹⁾。後述するように、最大宗派のゲルク派の場合、ラムリム（道次第）とラマチューパ（師供養）という二つの形式のツォクシンが最も流布している。ニンマ派では、パドマサンバヴァを中央に置いたツォクシンが代表的で、典拠とする文献の名称から「ロンチェン・ニンティク」のツォクシンと呼ばれる。パドマサンバヴァの後ろには数多くの経函が積み上げられているが、これは仏法そのものを象徴している。カギユ派は金剛薩埵を中心としたツォクシンを伝えている。現在、カギユ派の中のセクトに応じて複数のツォクシンが存在するが、ゲルク派やニンマ派のツォクシンに比べ、構成する人物や尊格の数は少ない。シチュー派の創出したツォクシンはマチク・ラブドゥンという女性を中心とする。彼女の創案したチューと呼ばれる行法と関連するため、「チューのツォクシン」とも呼ばれる。シチュー派の勢力は現在では微々たるものであるが、チューの行法は宗派の別を問わず広く実践され、マチク・ラブドゥンのツォクシンも

広く知られている。

ツォクシンに描かれる光景は、行者が観想する内容であるといわれている。チベット仏教の僧侶たちは、自己の師すなわちラマ (bla ma) への礼拝をきわめて重視する。チベット名称の名称として一般に流布している「ラマ教」も、これに由来する。そして、ラマの礼拝を形式化したものが、ツォクシンの観想である。僧侶はツォクシンを観想し、これへの礼拝・帰依を繰り返し行うが、そのためにツォクシンの中央の仏や祖師を自分の師と団体視したり、あるいはその一番近くにラマの姿を観想する。仏法僧の三宝に加え、ラマに対し恭敬の念を起こし、一心に帰依するのである。ツォクシンに対する礼拝として「七支分」と呼ばれる7種の段階からなる礼拝法が行われ、とくにその中の「マンダラ供養」と呼ばれるプロセスが重視される。僧侶は金属製の容器に米を満たし、これをスメール山を中心とする世界と見立て、観想によって生み出されたツォクシンの聖衆に捧げる。あらゆる宝で荘厳された世界を三宝とラマに捧げることで福德を積むのである。

ツォクシンは文字どおりには「集会の樹木」(tshogs shing) であるが、多くのチベット僧たちは類似の発音で表される「資糧の田」(tshogs zhing) と理解している。悟りへ至るための糧である福德が、ツォクシンの瞑想とそれへの礼拝によって蓄えられると考えるからである。

ツォクシンはマンダラなどと同様、チベット仏教絵画の重要なテーマのひとつであるが、古い作例はほとんど知られていない。チベット美術の関連文献が紹介するツォクシンは、いずれも比較的近年の作品である。同一宗派の同じ形式のツォクシンであっても、描かれている祖師や尊格にはばらつきがある。とくに祖師についてはそのツォクシンを観想した人物に直接つながる血脈にもとづくため、当然、そこに描かれる人々の数や顔ぶれは大きく異なる。その一方で木版画によるツォクシンもかなり普及していたようで、図像内容の固定化による特定のツォクシンの浸透も見られる。

現在、アメリカ合衆国のボストン美術館 (Boston Museum of Fine Arts) が所蔵し、梅尾氏によって紹介されたツォクシン (図1) は1795年という制作年代が確定できる数少ない作品である³⁾。中央に大きくシャカを描き、そのまわりに百を超える尊格と祖師が描かれている。現在、ゲルク派の伝える二種のツォクシンとは異なる図案である。この他に、この作品とほとんど同じ形式を持ったツォクシンが、G. トウッチ (Tucci) の *Tibetan Painted Scrolls* (以下 TPS) の中に含まれ (図2、図3)³⁾、さらに、アメリカ合衆国のミード美術館 (Mead Museum) にも類似の作品が所蔵されている (図4)⁴⁾。

チベットの絵画としてツォクシンは比較的良好に知られているが、その本格的な研究は意外に少ない⁵⁾。ツォクシンに描かれた人物や尊格の比定さえ、どの宗派の作品についても完全には行われていないのが実状である。その理由のひとつには、上述のように同一の形式であってもヴァリエーションが多く、図柄が確立してしないことや、古い時代の作品が

存在しないことがあげられるであろう。

本稿では制作年代が確定しているボストン美術館が所蔵するゲルク派のツォクシン（以下、ボストン本）を中心に、その内容を明らかにした上で、美術と宗教実践との関わりをツォクシンを手がかりに考察する。

2. 作品の概要

釈迦を中心とするボストン美術館のツォクシンは、たて79cm、よこ48cmの比較的規模の小さなタンカ（thang ka、軸装の彩色画）である⁶⁾。画面全体は巨大な樹木が占め、その中央には釈迦が坐っている。釈迦を取り囲むように仏、菩薩、イダム、羅漢、祖師などが描かれ、その数はおよそ130を数える（図5、図6、論文末のリスト参照）。ほとんどの登場人物は画面の中央を向いて坐り、中央の釈迦をつらぬく垂直の軸を中心にシメトリカルな配列をとる。樹木は水の中から空に向かって伸び、葉が生い茂り、薄桃色の花がいたるところに咲き乱れている。とくに中央の釈迦の頭光と光背には、釈迦を荘厳するかのよう、いくつもの花や蕾が添えられている。

釈迦は通肩で僧衣をつけ、右手は触地印、左手は定印の上に托鉢の鉢を載せる。やや伏し目がちにまぶたを開き、正面を向いて結跏趺坐で坐る姿は、チベットの釈迦坐像の一般的なスタイルである。他の尊格や祖師たちの二倍以上の背丈を有して画面の中央に描かれることから、作品の主演であることは容易にみとれる。

その他の尊格や祖師を上から順に見ていこう。

画面最上部の中央には、結跏趺坐で坐り金剛杵と金剛鈴を持った両手を胸の前で交叉する持金剛がいる。法身の持金剛で、すべての仏たちの根源的な存在である。

その左右には合計16人の人物が坐している。持金剛のすぐ右隣の文殊を除いて、すべて僧衣を身につけた祖師の像である。それぞれ独特の身ぶりや持物を持って表されている。作品には尊名や人名を示す銘文はまったく記されていないが、チベットの他の図像集やタンカとの比較から、何人かの人物は名称が推定される。持金剛の左隣で右手を前に出して坐っているのは、インドの僧アバヤーカラグプタである。その左にはサキヤ派の高僧サキヤパンディタが、両手を開いて問答のポーズを取る。文殊の下はゲルク派の開祖ツォンカパ、彼に向かい合って坐っているのはその高弟ケドゥップであろう。このほか、パンチェンラマの一世、二世、三世、ゴロツァワ、ウェンサバ・ロサントトゥップの姿などが確認できる。これらの人物は歴代のパンチェンラマとその前生者たちである⁷⁾。ただし、画面向かって右の方の人物の何人かは、名称は不明である。

中央の釈迦の頭上にいるのは、明妃を抱いた金剛薩埵、その左右はティローパ、クリシュナチャーリン、さらにその下はドーンビ・ヘルカ、アティーシャである。アティーシ

ヤ以外の三人はインドの成就者で、密教の分野の法統を表している。

彼らの左右にはそれぞれ四人ずつのグループが置かれている。向かって右は文殊と龍樹が含まれ、左のグループには弥勒と無著がいる。それぞれ、中観派と唯識派の祖師たちの姿で、ゲルク派の呼称では、順に甚深観と広大行の血脈という。各グループとも名称が決定できない二人ずつの高僧がいる。甚深観の方は聖提婆、月称、清弁などが考えられ、広大行の側は世親、解脱軍などの可能性があるが、明確な特徴がないため確定できない。これら二つのグループによって大乘仏教の主要な二つの流れが示され、中央の密教の流れとあわせて、インドからチベットに伝えられた仏教の主要な血脈が彼らによって表されている。

釈迦のむかって左には、多面多臂の仏たちが連なっている。中央寄りの尊格から順に大輪金剛手、赤ヤマーリ、黒ヤマーリ、カーラチャクラ、ヴァジュラバイラヴァ、グヒヤサマージャ、チャクラサンヴァラ、ヘーヴァジュラである。いずれもインド後期密教に登場し、チベットでも厚い信仰を集めたイダムたちで、儀軌や経軌に従った姿で描かれている。

このイダムのグループと対をなすのが、釈迦の向かって右に座す仏や菩薩たちである。その数は14尊を数え、最も釈迦に近い位置には四面を持つ一切智大日がおかれている。その他は悪趣清浄王、宝手、無量寿などの仏や、観音、金剛手などの菩薩が含まれるが、尊名の確定できない尊も含まれる。静謐な姿で描かれたこれらの尊格たちは、忿怒形で表されたイダムたちと姿の上でも対称的である。

これらの尊を取り囲むかたちで、結跏趺坐で坐す僧形の仏たちが帯状に連なっている。全部で35尊を数え、『宝積経』を典拠とする三十五懺悔仏に比定できる。三十五仏の中央にはツォクシンの中央の釈迦と、僧衣の文様のみ異なる同じ姿の釈迦が描かれているが、これは三十五仏の筆頭の釈迦である。以下34尊の仏たちは、身色と印、あるいは持物のみによって区別される⁸⁾。これにしたがって配列を見てみると、釈迦の向かって左に二番目の金剛不壊仏、向かって右に第三の宝光仏、以下、左右交互に置かれているのがわかる。僧衣の文様に変化を与えて単調さを軽減する努力が見られるが、これは儀軌には規定されておらず、絵師の裁量によるものである。

三十五仏の下にはやはり帯状に十六羅漢の姿が描かれている。チベットでは伝統的に十六羅漢に憂婆塞ダルマターラと和尚を加えた18人で構成され、その尊容も厳密に規定されている⁹⁾。ここでもそれは忠実に守られている。配列は三十五仏とは異なり、画面の向かって左側に前半の8人、右側に後半の8人を置き、ダルマターラは向かって右端に、和尚は左端に置かれている。

樹木の下端には護法尊たちがならぶ。彼らは礼拝の対象であると同時に他の仏や祖師たちの聖衆を護衛する役割を持つ。マハーカーラ、ヤマ、ハモ、ヴァイシユラヴァナなどの姿が見られる。彼らにまじって白ターラー、緑ターラー、白傘蓋の女尊の姿も含まれる

が、この三尊と、さらに向かって左端のアチャラ、ヤマの二尊は、ボストン本のみにもみられる尊格で、後述するトゥッチの版には含まれない。同じようにこの作品のみに登場する尊格として、画面右端のやや上よりのプラティサラと仏頂尊勝、左側のヴァジュラフンカーラと二種の観音がいる。

樹木の枝の下の幹の両側には、法輪を捧げ持つ梵天と、宝珠を捧げる帝釈天が坐っている。この二人は木の根元から伸びた細い枝の上に雲とともに描かれる。その外側に左右二尊ずつ合計四尊の甲冑を着た人物がいる。むかって左から持国天、増長天、広目天、多聞天の順に配された四天王である。さらに梵天と帝釈天の下では、水の中から上半身を出した龍（ナーガ）がそれぞれ供物を捧げている。

樹木とその周囲については以上の通りであるが、画面の向かって左下の隅に陸地があり、象や種々の人物、そして、法輪や法螺貝などが描かれている。これらは転輪王の七宝と八吉祥と呼ばれるシンボルである。また右下には墓石のような白い物体が水の中に立っている。これはスメール山を中心とした世界図で、その頂上には帝釈天の居城もある。スメール山の下に波状に描かれているのは、この山を取り囲む七重の山脈で、さらにその外側に位置する四大州も水の上に浮かんでいる。

この作品にはかなり長い銘文が記されている¹⁰⁾。それによれば、このタンカはシャーキャ族の商人ヌリペンドラジョーティによって、家門の興隆のためにタシルンボ寺において、1795年に奉納された。おそらく、ネパールからはるばるシガツェのタシルンボ寺に巡礼に訪れた人物によって寄進された作品なのであろう。チベットで制作されながらチベット文字ではなく、ネパールのナーガリー文字で銘文が記されているのはそのためである。

トゥッチがTPSの中で紹介するツォクシン（以下、トゥッチ本）は、中央に位置するのがシャカではなくツォンカパである点と、樹木の周囲の何尊かが描かれていない点を除いて、ボストン本とほとんど同一の内容を持った作品である。登場する尊格や祖師、彼らの取るポーズや図像上の特徴、さらには人物の表情に至るまで酷似している。また樹木の表現も、枝や葉の生い茂る様子や花の形、さらにはその位置までほとんど一致する。下段にはチベット語で銘文が記され、トゥッチが転写と翻訳を試みているが、制作年代に結びつく情報は含まれていない¹¹⁾。ボストン本に比べ技術的にすぐれていることや、ボストン本のみに見られる尊格が全体のバランスやまとまりを乱していることから、それよりもはやい時点での制作で、その流れを汲んで作られたのがボストン本と考えられる。なおトゥッチは作品の大きさや所蔵者などの基本的なデータを明らかにしていない。またTPSに含まれる図版はモノクロームであるため、彩色の状態は不明である。

ミード美術館所蔵のツォクシンは、中央がツォンカパでトゥッチ本に近い形式を持つ。登場する尊格もトゥッチ本になくボストン本のみにも含まれる尊はここにも現れない。ただし、上記二点に見られない尊として、三十五仏と十六羅漢の間に八尊の供養菩薩が描かれ

ている。それぞれ特定の供物を手にした女尊で、左右に四尊ずつおかれている。画面の構成はタッチ本とほとんど同じであるが、右下の隅にマンダラを捧げる僧侶の姿が登場する。この人物も上記の2例には含まれない。作品は細部まで細かく描かれているが、形式化が進み、描線は単調で精気が感じられない。また三十五仏やその上に位置する仏や菩薩の身体の色を等しく金色で彩色している点は、儀軌に対して絵師が精通していなかったことをうかがわせる。全体の大きさは134cm×90cmで、作品掲載の図録の解説者は18世紀末から19世紀のはじめに中央チベット、もしくは東チベットで制作されたと推定する。

3. ゲルク派の2種のツォクシン

現在ゲルク派が伝えるツォクシンはラムリムとラマチューパの2種である¹²⁾。このうち、ラムリムはツォンカパの著した著作の名称に由来する。ツォンカパはこの著の中で、大乘、小乗、金剛乗のすべての仏教の教えと修行階梯を、統合的に体系づけている。

ラムリムのツォクシン(図7)として広く流布しているものは、中央にシャカが大きく描かれ、これを中心に四つのグループで構成される。シャカの胸には持金剛父母仏が円形の区画の中に描かれているが、画面の全体の最上段に位置する尊と同じ法身の持金剛である。シャカの上部にはこの持金剛からはじまる密教の教えを伝えた成就者やラマたちがいる。その中にはアティーシャやツォンカパ自身の姿も含まれる。

シャカの左右には文殊と弥勒が脇侍のように坐しているが、彼らはその後ろに集まる二つのグループ、すなわち甚深観と広大行の祖師たちの筆頭である。ボストン本などでもやはり同じグループが描かれたが、その数はラムリムのツォクシンでははるかに多く、それぞれ三七名を数える。龍樹と無著は各グループの最上段におかれる。

シャカの下方には扇を広げたような区画にいくつかのグループが帯状に広がる。シャカが一番近くには6人のラマの姿が描かれる。実際のツォクシンの観想をする場合、ここには観想者自身の直接のラマをおくといわれる。その下にはイダムとしてヴァジュラバイラヴァを中心に7尊の尊格が描かれる。ついで、10尊の仏、11尊の菩薩、13人の仏弟子が順に続く。その下には前と同様、十六羅漢が同じ配列でならぶ。さらにこれらの集団の護衛として、ダーキニーと護法尊が取り囲み、画面全体の下端には四天王と梵天、帝釈天がやはりおかれている。

画面のむかって左下には合掌する僧、右下にはマンダラを捧げる僧侶の姿も見られるが、七宝や八吉祥は描かれていない。また、ツォクシンと呼ばれているにもかかわらず、樹木の姿は明瞭ではなく、シャカの下に諸尊は基壇のようなものに乗っているようにも見える。

つぎに紹介するラマチューパのツォクシンに比べ、ラムリムのツォクシンのヴァリエー

ションは少ない。木版画も流布していたようで、多田等観や河口慧海将来の作品や、逸見梅栄が紹介する作例は、同一か類似の版木ですられたものようだ。彩色されたものでは、シャカの頭上の三つのグループの間にラマや仏を描いたものもある¹³⁾。Olschak の紹介するツォクシンは、他のラムリムのツォクシンとかなり異なる形式を持つ。シャカの頭上のグループに含まれるラマの数がかなり多く、また、シャカよりも下のグループに関してはイダムの顔ぶれに違いがある。ただし、尊格やラマの数が多きことを除けば、内容的には異なるものではない。

ラムリムのツォクシンとボストン本などのツォクシンとの間の相違点をまとめるとつぎのようになる。ラムリムでは中央の尊がシャカで一定している。ラマの数が多し。シャカとイダムの間にラマが加わる。イダムと仏菩薩がシャカの左右ではなく、下方に整列している。三十五仏が姿を消し、かわって仏弟子、そしてダーキニーが加わる。七宝、八吉祥、スメール山が描かれない。

ラムリムのツォクシンに比べ、ラマチューパのツォクシン（図8）は作品相互にかなりの相違点が認められる。現存する作品間で、まったく同じ内容を持った作品は見あたらない。いずれもツォンカパを中心におき、ラムリムのツォクシンと同じようにその周囲に四つの区画を作る。上部中央が密教、左右が甚深観と広大行の伝承者たちである点はかわりはない。またツォンカパの下に広がる扇形の区画に描かれる尊格たちも共通しているものも多い。多くのラマチューパの作品では、上部左右に浄土図を小さく描き、さらにその近くにラマたちの姿をおく。ただし、これらのラマの数は一定ではない。また、画面の下の向かって左端には、ボストン本などと同じく七宝と八吉祥を描き、また、位置は異なるが、そのすぐ右隣にスメール山を水面におく。右端にはマンダラを捧げるラマの姿も描いている。

ラマチューパのツォクシンは、おもにツォンカパの下の区画の登場人物から二つのタイプに分けることができる。いずれのタイプもはじめの三つのグループはラマ、イダム、仏菩薩であるが、そのつぎに三十五仏、そして十六羅漢をはさんで八供養菩薩をおくものと、仏弟子と十六羅漢、そしてダーキニーをおくものがある。前者はミード美術館のものと同じメンバーで、後者はラムリムのツォクシンと共通している。このほか、イダムの配置やメンバーにかなりのばらつきがある。これは各タイプの内部でも認められ、それぞれのツォクシンを伝えたラマのイダムが中央を占めるためであろう。また、仏菩薩の顔ぶれにも若干の相違が認められる。

比較的近年に描かれたと考えられるラマチューパのツォクシンに、膨大な数のラマたちの姿が描かれているものがある。とくにツォンカパの頭上にならぶ密教のラマたちは、整然と五列でならんでいる。それぞれ密教の中の特定の伝承の本尊とその後継者たちであるが¹⁴⁾、あたかも階段状の雛壇に整列しているかのようである。ツォンカパの下の部分の尊

格を見ると、仏弟子とダーキニーたちが含まれるため、二つのタイプのうちのひとつの発展形態と推測される。

4. ツォクシンの儀礼

ツォクシンは観賞用の絵画ではない。また単なる礼拝用の尊像画でもない。行者や僧侶が観想する内容を描いたものといわれる。彼らが礼拝するのは、観想上のラマや仏たちであって、実際に描かれたツォクシンのタンカではない。

ゲルク派の場合、ツォクシンの観想法を説く文献は、16世紀のウエンサパの著した念誦法と、その転生者と信じられているパンチェンラマ一世の儀軌である¹⁵⁾。

このうちウエンサパの説くツォクシンは、ラムリムのツォクシンに相当する。それによれば、行者は自分の前の空間に巨大な玉座をまず観想する。この玉座は8頭の獅子によって支えられている。玉座の上には雑色蓮華と月輪、日輪の座があり、ここに自己のラマが坐している。ただし、ラマはシャカの姿をとり、右手は触地印、左手は禪定印に甘露の鉢を載せている。ラマであるシャカのまわりには、ラマにいたる血脈の祖師たちや、イダム、仏菩薩、勇者 (dpa' po)、ダーキニー、護法尊が取り囲んでいる。以上が観想の内容であるが、具体的な尊名や血脈のラマたちの名称は示されない。また、イダム以下の尊格たちは、実際のラムリムのツォクシンに描かれた順序に一致するが、仏弟子や羅漢、三十五仏などには言及していない。また、ツォクシンの観想といわれながら、樹木そのものを観想するという指示も含まれない。

一方、パンチェン一世の儀軌は「ラマチューパの儀軌」と呼ばれ、その名の通り、現在でもラマチューパの儀礼を行うときの典拠として広く流布している。この文献が説くツォクシンの観想を田中氏の訳文にしたがって以下に示す¹⁶⁾。

「楽空無別の広大な天空に、普賢の供養雲が密集する中、葉と華と果実に飾られた、一切の欲を満たす如意樹の頂の、獅子が咆吼する宝座の上の、広大な蓮華と日輪・月輪の上に、三恩を受けた根本ラマ [があり]、一切仏の自性なり。姿は袈裟を着る比丘にして、一面二臂で白き笑みをたたえ、右手は説法印、左手は禪定で、[上に] 甘露を満たした鉢を持つ。サフラン色の三種の法衣を着け、頭には黄色の学僧帽をかぶる。胸には王者持金剛があり、一面二臂で身は青色、金剛杵と鈴を持って界自在母を抱擁し、俱生の楽空の遊戯を楽しむ。種々の宝珠の飾りをちりばめ、天界の絹の衣を着る。[三十二] 相 [八十] 種好を具し、千の光明に輝き、五色の虹に包まれた中に、金剛結跏によって坐し、清浄なる五蘊は五善逝 (=五仏)、四界 (四大) は四仏母にして、[六] 処と脈管、支節は [八大] 菩薩なり。毛孔は二万一千の羅漢にして、肢体は [十大] 忿怒王なり。光明は護方神、夜叉神、秘密衆にして、世間 [諸天] は足

下の座となり。周囲を次第の如く、直接と歴代のラマ、守護尊と曼荼羅の諸尊、大海の如き仏・菩薩と勇者、ダーキニー、護法尊に圍繞されて坐す。』

このようにウェンサパやパンチェンラマ一世の文献には、ツォクシンの全体的なイメージが概略的に示されるが、具体的にどのラマや尊格を観想するかは明示されていない。また中央に観想するのがシャカとツォンカパであることはそれぞれ規定されているが、それ以外のメンバーは二種のツォクシンの間に何ら差異はない。すでに述べたように、実際のツォクシンには樹木の下に七宝や八吉祥、スメール山、マンダラを捧げるラマの姿などが描かれることもあったが、これらについてもふれていない。

実際のツォクシンの観想は、師のラマによって口伝えにその姿が教示され、観想者の能力や資質に応じて適切なアドバイスが与えられたのであろう。また、それぞれのラマが継承してきた血脈やイダム、重要とみなす尊格はさまざまであるはずで、ひとつの流派の中でも種々のツォクシンのイメージが伝えられたことが予想される。

現代のゲルク派の伝えるラムリムのツォクシンは、たとえば次のような方法で瞑想されている¹⁷⁾。はじめのシャカの瞑想はウェンサパの念誦法にのっとっているが、そのときに持金剛と、さらにその心臓に青いフーン字を観想するよう指示する。このシャカを集会樹の中央の枝に観想し、さらにその前後左右に四つの枝を観想する。ツォクシンは五つの枝からなる巨大な樹木なのである。後方の枝には持金剛を中心とした血脈のラマたち、シャカの右の枝には弥勒以下の広大行のラマたち、左の枝には文殊以下の甚深観のラマたちが取り囲んでいる。残りの前方の枝には、観想者自身が教えを受けたすべてのラマを観想する。実際のラムリムのツォクシンの下半分をしめるイダム以下の諸尊は、五つの枝を取り囲んで観想される。ツォクシンの絵ではシャカの下に扇状に広がる部分は、実際はツォクシンの五つの枝の周囲に相当することになる¹⁸⁾。

一方のラマチューパのツォクシンもほぼ同じようなイメージで観想されている¹⁹⁾。まず、虚空に金剛でできた巨大な蓮華を観想する。その上には台座があり、四方を獅子が守る。台座の中央にツォンカパを観想し、その頭上には持金剛がいる。ツォンカパの胸からは左右に光線が伸び、右に弥勒、左に文殊が坐して、これら三尊をそれぞれの血脈のラマが取り囲む。ツォンカパのすぐまわりには観想者自身のラマが取り囲み、ここから順次、外側に向かって水平に無上ヨーガ、ヨーガ、所作、行の各タントラの尊格、仏菩薩、声聞、縁覚、勇者、勇猛女、護法尊のグループが広がっていく。

ここではツォクシンの樹木は観想されず、ウェンサパの文献のような蓮華と台座が舞台となる。したがって五つの枝の観想もなく、持金剛のグループは実際のツォクシンの作例のようにツォンカパの頭上に位置し、また直接教えを受けたラマたちはツォンカパの前方ではなく、周囲の尊格とツォンカパとの間に位置する。イダムがタントラの四階梯にしたがって並び、声聞、縁覚などが言及されている。これらの諸尊が中央のツォンカパと同じ

平面上を水平に取り囲んでいるのは、ラムリムの場合と同じである。

ツォクシンの観想をチベットの僧侶たちは日常的に行っている。観想したツォクシンを礼拝供養することによって、三宝とラマへの帰依が行われるからである。多くの僧侶たちは一日の始まりとしてツォクシンの観想を行う。また、ツォクシンの観想とそれへの礼拝は「前行」(ngon 'gro)とも呼ばれ、さまざまな儀礼の第一段階におかれている。主要な儀礼を行うためのウォーミングアップのような性格を持つ。

ゲルク派の場合、前行は以下の六段階からなる²⁰⁾。(1)道場の浄化と尊像の配置、(2)清浄なる供養、(3)正しい座法と帰依と発心、(4)聖衆の世界の観想、(5)「七支分」とマンダラ供養、(6)至心な祈願。このうち第四がツォクシンの観想、第五がツォクシンへの礼拝にそれぞれ相当する。第五の段階は「七支分」あるいは「七種無上供養」とも呼ばれる²¹⁾。その名称どおり、①礼拝、②供養、③懺悔、④随喜、⑤勧請、⑥発菩提心、⑦回向の七段階のプロセスからなる。「七支分」の中核をなすのはその第二段階の「供養」である。僧侶は観想されたツォクシンに対し、四種の水、灯明、花などの供物を供え、続いて「マンダラ」を捧げる。この場合のマンダラは金属でできた円筒形の容器で作る立体的なマンダラで、大きさの異なるいくつかの容器に米を満たし、塔のように積み重ねて作る。最後に宝珠形の飾りを上部におく。このマンダラはスメール山をかたどり、そこに満たされた米は世界を飾るさまざまな宝のかわりとされる。僧侶は実際にはスメール山を瞑想し、その周囲に大陸や山脈、月、太陽を観想する。さらに転輪王の七宝によってもこの世界は荘厳されている。これら宝石で満ちあふれた全世界を、僧侶はツォクシンの仏やラマたちに寄進するのである²²⁾。

ツォクシンの絵の右下に小さく描かれたマンダラを捧げる僧侶の姿は、マンダラ供養を行うツォクシンの観想者の姿に他ならない。そして、その近くに描かれたスメール山はツォクシンに献ぜられた全世界を、七宝はその装飾品をそれぞれ表している²³⁾。

ツォクシンの観想法と七種無上供養を中心にすえた儀式もチベットの僧侶たちは行っている。これがラマチューパで、ゲルク派の寺院では毎月10日と25日の2回、寺院のメンバー全員が参加して行う。三宝とラマへの帰依という形を取りながら、実際は寺院に寄進された供物を享受する前に、仏やラマたちに供え、その一部をお下がりとして僧侶に配分するために行われる。半月に1回、定期的に行われるのはそのためである。この儀式で用いられているのがパンチェンラマー世の「ラマチューパの儀軌」で、ゲルク派内ではおそらく彼の時代に制度化されたのであろう²⁴⁾。

5. 絵画としてのツォクシンの形成

ツォクシンは僧侶の観想の世界を描き出したものとされる。しかし、瞑想の中のイメー

ジを忠実に写し取ったものであるかといえ、必ずしもそうではない。ツォクシンに現れる多くの尊格や人物像に、既存の図像が転用されているからである。ボストン本とトゥッチ本のツォクシンで、このことを見ていこう。

樹木の上部の雲の中に坐るラマたちは、多くが歴代のパンチェンラマとその関係者たちである。これらはパンチェンラマの転生者を描いた一連のタンカのシリーズから、おそらく転用されている。これはゲルク派内で人気のあったタンカのセットのひとつで、彩色画と木版画の両者にいくつものヴァージョンが存在している。その全体は14点からなり、それぞれ中央にパンチェンラマやその前生者の姿を大きく描き、周囲にはその人物に関するエピソードや、関係する主要な尊格の姿が小さく描かれる。主役となる人物は、チベットのタンカにありがちな正面向きの動きの乏しいものではなく、いずれもいきいきとした躍動感を伝えている。この歴代パンチェンラマのタンカ・セットはトゥッチがTPSの中で木版画の作例を紹介したことで、つとに知られるようになった(図9)。その後、シュミット(Schmid)が単独の研究書を著し、詳細な内容と図像の解釈が示された²⁶⁾。近年、ジャクソンがこのタンカのオリジナル・ヴァージョンの作者を、チューイン・ギャンツォ(Chos dbying rgya mtsho)とみなす見解を発表した²⁶⁾。この人物はチベット絵画の重要な流派のひとつである新メンリー派(Man ris sar ma)の創始者と目され、パンチェンラマ一世の庇護のもと、旺盛な創作活動をしたことで知られる。中国画の影響を受け、風景や人物表現に新境地を開いた。そして、その活躍の場は、パンチェンラマの居住寺であったタシルンポ寺と考えられている。現在流布しているタンカ・セットは、チューイン・ギャンツォのこのオリジナルにパンチェン二世と三世を加えたものとジャクソンは推測している。タシルンポ寺を中心にこのセットがゲルク派内で広く伝えられていったことが予想される²⁷⁾。また、パンチェンラマ四世を中央に大きく描き、これらの転生者をその周囲に配したタンカも残されている(図10)。

ツォクシンの樹木の上部におかれる密教、甚深観、広大行の三つの血脈のグループは、多くが既存の図像集に描かれた姿がそのまま用いられている。蛇の頭光をともなった龍樹、杖とカバーラを持ったクリシュナチャーリン、虎にまたがるドーンビヘルカなどは、いずれも著名な「八十四成就者図像集」に見られるものである²⁸⁾。ただし、無著と考えられる像と、甚深観の右端の人物は、おそらく同じモデルからの転用と考えられ、さらに、甚深観の一番下の人物は、上段のアバヤーカラグプタの像の再利用であろう。

シャカの向かって左に集まるイダムについては、特定のモデルをあげることはできない。というのは、これらのイダムの図像上の特徴は経軌に厳密に定められ、それから逸脱することはほとんどないからである。持物や身色、臂数から、姿勢や身体プロポーションにいたるまで、時代や地域による変化はきわめてわずかである。

イダムの反対側におかれる仏・菩薩は尊名の未比定のものもある。仏の何尊かは『悪趣

清浄タントラ』にもとづく普明大日のマンダラに登場する。「三百尊図像集」の中に同一の尊格がいくつか見出されるが、すべてではない。

三十五仏の尊容は、ツォンカバが著した儀軌にのっとって描かれている。この文献はゲルク派に伝わる三十五仏の規範となったもので、現存の作品の多くもこれにもとづいている。しかし、文献成立以前の作品や他派の三十五仏にはこれとは一致せず、たとえば金剛界マンダラの五仏と同じ印と身色の仏たちを集めて三十五仏としているものもある²⁹⁾。いずれにせよ、三十五仏を描いた作品はチベットで人気が高く、中央にシャカを大きく描き、残りの34の仏たちで周囲の余白を埋めた作品が数多く伝えられている。

ところで、ツォクシンではシャカを除く34の仏たちが、左、右、左、右と順に交互に現れた。これは、左右に前半後半の各グループを配した十六羅漢の配列とは異なる。行者が観想する場合、各グループの構成メンバーの配列が一貫していないのはおそらく不都合であったであろう。三十五仏の場合、ツォクシンに描く場合の典拠となった図像モデルが、おそらくシャカの左右に同じように交互に配した作品であったことが予想される。三十五仏を描いた作品の中には、このように左右交互に34の仏を描いたものも実際に存在する³⁰⁾。

十六羅漢もチベットの絵画で好まれた題材である³¹⁾。各羅漢と二憂婆塞の尊容は固定しており、ここでもその規定に従って描かれている。多くの羅漢が中央に顔を向けて描かれているが、向かって右のグループの第三、四、五の三人のみは、正面を向き、他とのバランスを欠いている。これもおそらくモデルとなった図像において、この3人のみが正面を向いていたのであろう。

十六羅漢図はこれら18人のみを描くよりも、中央にシャカをおいてその周囲に十八人を配した作品の方が多い³²⁾ (図11)。また、三十五仏と組み合わせ、中央に大きくシャカを描き、上の方に三十五仏、下に十八羅漢を描いた作品もある³³⁾ (図12)。ツォクシンで三十五仏の中央のシャカがやや大きく描かれ、十六羅漢たちの領域にまでおよんでいるのは、そのような図像伝統を反映したものであろう。あたかも、三十五仏と十六羅漢図を横に引き延ばして、ツォクシンの木の中にはめこんだような配置になっている。

ツォクシンの下の端に並んだ護法尊たちも、イダムと同様、いずれもチベットの仏画に頻繁に登場する尊格たちで、形式化されている。四天王も同様で、典型的な表現でここでも描かれている。梵天、帝釈天の二天や二人の龍も、「三百尊図像集」のような既存の図像集にすでに見られるもので、細部の特徴や奉獻の姿勢も酷似している。

ツォクシンに描かれた人物や尊格の姿を、既存の図像集などと比べてきたが、歴代のパンチェンラマとその前生者たちを除き、その多くが「三百尊図像集」と重なることが多いことは注目される。チベットの図像集にはいくつか有名なものがあるが、その中でもこの「三百尊図像集」は、「五百尊図像集」と並んで早くから重視されてきた。「三百尊図像集」

はゲルク派の活仏チャンキャ・ラマ二世であるロールペー・ドルジェ（1717-1778）によって編纂されたもので、正式の名称は「ラマ、最上のイダム三尊、護法尊を含むツォクシンの三百の尊像」（bla ma yi dam mchog gsum bka' sdod dang bcas pa'i tshogs zhing gi sku brnyan gsum brgya'i grangs tshang ba）という。この名称からも知られるように、この図像集はツォクシンに描かれる尊像を集成したもので、実際、タシルンポ版のツォクシンに登場する尊像や祖師の八割以上は「三百尊図像集」にも含まれる。両者が密接な関係にあったことが予想される。チャンキャ・ラマ二世とパンチェンラマ一世がほぼ同時代の人物で、交流があったとも伝えられている。しかし、両者のあいだでは一致しない像もあり、単に一方が他方の典拠となったのではないことにも注意しなければならない。両者の関係については、稿を改めて考察したい。なお、この「三百尊図像集」は白描のものがすでに19世紀の終わりから知られていたが、「五百尊図像集」などと同様、木版画の方がオリジナルと考えられる。これまでに二種の版本が発表されている³⁴⁾。

ツォクシンの舞台ともいえる樹木は何に由来するのだろうか。サクラを思わせる花や蕾は特定の樹木をモデルにしているのかもしれない。しかし、根元の部分におかれた宝珠や池の中からのびている点などは浄土図に見られる如意樹との結びつきを予想させる（図13）。実際、宗派によってはツォクシンの観想は浄土の観想をモデルにして行われた場合もあったようだ。ゲルク派内の伝える浄土の観想法も、『阿弥陀経』にしたがい、阿弥陀が坐すのは池の中にそびえる巨大な如意樹である³⁵⁾。ツォンカバが著した浄土観想法の儀軌や、チャンキャ・ラマがそれに対して加えた注釈書が、ゲルク派では広く用いられている。ゲルク派の僧侶たちにとって、如意樹にのった阿弥陀を中心とした浄土の観想は一般的な修行法のひとつであったのである。

池の中からのびる蓮華にシャカが坐している姿は、すでに述べたシャカを中心とした十六羅漢や三十五仏のタンカにも見ることができる（図12）。中央におかれたシャカの姿は、右手は触地印を示し、左手は禪定印の上に鉢を載せ、ツォクシンのシャカの姿とまったく同じである。シャカが坐る蓮華の茎の横には、上半身を水中から出して合掌する二人の龍の姿も認められる。

このように、ツォクシンに登場する人物や尊格、あるいは樹木のモチーフは、いずれもすでに存在していた図像にもとづき、これを転用したり、その影響を受けている。それではツォクシンの画面構成についてはどうであろうか。

ツォクシンは樹木を背景に、上部に祖師、中央にシャカや高僧、その周囲から下にかけては諸仏、菩薩などが取り囲み、最下段には護法尊が並ぶ。これもツォクシンの観想に根ざした配置のように思われるが、実際はチベットのタンカに一般的に見られる画面構成の原理に支配されている³⁶⁾。チベットのタンカの多くは、中心に主要な尊格や祖師を大きく描き、その周囲にさまざまなラマや尊格を小さく描く。その場合、上段には中心となる人

物や尊格の教えを伝えたラマたちの姿を並べる。インド以来の教えの血脈を示すためである。中心となる人物や尊格の左右にはそれに関連する尊格や眷属を配する。マンダラの中尊を描いた場合、マンダラを構成する他の尊がしばしば描かれる。そして、その場合、配列の法則は、上位の尊格ほど画面の上におかれ、護法尊や四天王のような下位の尊格は画面の下に並ぶことが多い³⁷⁾。

ツォクシンの場合、中央に描かれたシャカや高僧の大きさは、通常のタンカほど大きくはないが、血脈という時間的な連なりを画面の上部におき、残りの部分はパンテオンのヒエラルキーにしたがっている点は、タンカの一般的な構成原理によく一致している。

6. おわりに

チベットの仏教絵画の代表的な形式のひとつであるツォクシンについて、ポストン美術館が所蔵する作例を中心に考察を加えてきたが、宗教実践と美術という観点からまとめてみよう。

ツォクシンが単なる絵画ではなく、チベットの僧侶の間で広く行われるツォクシンの観想とその礼拝供養という実践に深くかかわっているのは確かである。樹木に聖衆を描くというモチーフ自体、このような実践形態と切り離しては考えられない。しかし、ツォクシンとして描かれた作品そのものは、行者や僧侶の瞑想の世界を忠実に写し取ったものではない。そこに含まれるほとんどの人物や尊格が、すでに存在していた図像を集めて構成されているからである。樹木という背景の中にさまざまな図像集やタンカから切り抜かれた人物群を、コラージュのようにちりばめている。もっともこのような形式自体、はじめに樹木を観想し、そこに血脈のラマやパンテオンの神々を配するという、ツォクシンの観想の方法が要請した形式であるかもしれない。しかし、その画面構成の原理もツォクシンに固有のものではなく、多くのチベットのタンカに共通する。

瞑想の世界の絵画表現という視点とは逆に、ツォクシンの絵が瞑想の時のイメージ形成に用いられたとも考えられる。ツォクシンの木版画が何点も伝えられていることは、印刷物を媒体としてツォクシンのイメージが多くの僧侶の中に浸透していった可能性も否定できない。しかし、実際のツォクシンの瞑想は、宗派のみならず行者ひとりひとりで大きく異なっていたはずである。自分の直接のラマをそこに瞑想しなければならず、そのラマにいたる血脈も同門の僧侶でもない限り、それぞれ異なる。各僧侶に固有のツォクシンのイメージがあり、具象化されているのはそのわずかな例にすぎない。僧侶ひとりひとりや寺院ごとのツォクシンの作例が存在していたとは、とうてい考えられない。彩色された絵画としてのツォクシンを、実際に彼らが目にすることができるようになったのは、印刷技術の発達したごく近年のことであろう。逆に、これはツォクシンの観想には具体的、具象的

なモデルが必要とされなかったことも示している。チベットの僧侶たちは自分の能力に応じた範囲でラマや尊像をイメージし、これに礼拝供養をしていたはずである。

ツォクシンの右下に描かれるスメール山を中心とした世界図や、マンダラを捧げる僧侶の姿は、ツォクシンの儀礼を抜きにしては理解できない。世界を表す「マンダラ」を手にする僧侶、そこにシンボライズされたスメール世界、そしてそれが奉獻される仏たちの国土、これら次元の異なる三つの世界が圧縮された形で表現されている。そこには、自分自身を含むスメール世界を、自己の手の中に作り、それを実際の全宇宙に重ね合わせ、さらにそれを仏たちに捧げるという複雑に入り組んだ入れ子式の瞑想の世界がある。ただし、それはチベット独自の瞑想の世界の表現方法であって、インドにまではさかのぼれない。

ツォクシンのような仏たちの集合体は、チベット仏教のルーツであるインド密教ではおそらくマンダラに相当するであろう。仏教だけではなく、ヒンドゥー教のヤントラや、あるいは「サマヴァサラナ」(samavasaraṇa) と呼ばれるジャイナ教の集会図も同じ範疇に属する³⁸⁾。これらインド起源の集合図は、いずれも幾何学的な形態に還元された展開図のように表現されている³⁹⁾。そこでは空間は閉ざされ、中心と周縁のあいだには緊張関係がある。しかし、ツォクシンに描かれているのは大地と池、そしてそこから空高くのびる樹木とたなびく雲という叙景的な内容である。聖衆の世界は芝居の書き割りのようであるが、遠近感を持ち、大地と虚空の中に拡散していく。

もちろん、インド密教のマンダラはチベットに伝わり、そこではインド以来の正統な方法で多くの作品が生み出された。しかし、その一方でマンダラは尊像タンカとしても描かれ、その場合、マンダラを構成する諸尊はマンダラの楼閣から解放され、主尊のまわりに整列するようになる。マンダラにおいて中心から周縁へと同心円的に示されたヒエラルキーは、タンカの場合、上から下へとという垂直の軸へと置き換えられる。さらに後世の作品になると、ツォクシンの場合のようにピラミッド状の舞台を大地の上にもうけ、ここにマンダラの諸尊を上から順に置き、さらにその上には歴代の継承ラマたちの姿を雲の中に描いている(図14)。マンダラのツォクシンの表現とでも呼ぶべき作品さえ現れるのである。

註

- 1) チベット仏教の各派のツォクシンについては田中(1990, 1995, 2001)に解説がある。ゲルク派の伝えるツォクシンの類型とそれぞれの作例については後述する。
- 2) 梅尾(1986: Pl. III 8-1)
- 3) Tucci(1949: Pls. 83, 84)
- 4) Rhie & Thurman(1991: Pl. 154)
- 5) 上述の田中氏の他には図版解説のかたちで Tucci(1949: 408-409), Getty(1962), Olschak(1973: 70-71), Jackson(1984: 27) などがあるが、いずれも紹介の域を出ない。
- 6) チベットにおけるタンカの概要、歴史については田中(2001)がくわしい。

- 7) これらの人物名のいくつかは、梅尾氏 (1986) の比定とは一致しない。
- 8) ゲルク派が伝える三十五懺悔仏については田中 (1990: 112-121) に尊容の記述がある。三十五仏については後でもふれる。
- 9) 十六羅漢の尊容についても田中 (1990: 236-8) にまとめられている。
- 10) 銘文の内容は梅尾 (1988) の図版解説にしたがう。
- 11) Tucci (1949: 410)
- 12) 現在、写真集などに掲載されるツォクシンの作例を後述の分類にしたがって示すと以下の通りである。(1) ラムリム Lauf 1976: Pl. 41; Olschak 1973: p. 71; 李他篇 1984: Pl. 93; 田中 1990: p. 83; 東北大学東洋・日本美術史研究室編 1986: p. 130 (河2-089-1); 逸見 1985: No. 970。(2) ラマチューバ (供養菩薩を含み、中央のイダムが秘密集会) 田中 1990: p. 85; 東北大学東洋・日本美術史研究室編 1986: p. 131 (河2-090-1); 梅尾 1986: Pl. III 8-2; 蓮見 1996: Pls. 109, 110; Getty 1962: 口絵。(3) ラマチューバ (供養菩薩を含まず、中央のイダムがカーラチャクラ) Lauf 1976: Pl. 40; Olschak 1973: p. 70; Jackson 1984: p. 35; 逸見 1985: No. 677。(4) ラマチューバ (尊格数が多く、上部中央に五つの帯がある) 田中 1993: p. 72; ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ 1996: 口絵6; クンチョク・シタル他 1995: p. 57。
- 13) 李他篇 (1984: Pl. 93); Lauf (1976: Pl. 41)
- 14) これらの五列の血脈についてはクンチョク・シタル (1995: 59) に説明がある。
- 15) 該当個所の和訳は田中 (1990: 82-88) に含まれる。このうち、パンチェンラマー世の儀軌は *Bla ma mchod pa'i cho ga* のタイトルで「パンチェンラマー世全集」の第一巻に含まれる (1973)。また、ゲルク派の常用経典のひとつとして、さまざまどころから出版されている。このうち、筆者が参照したものは Tibetan Cultural Printing Press 発行の *Zab lam bla ma mchod pa bde stong dbyer med ma dang / tshogs mchod bcas bzhugs so* である。もう一方のウエンサパの儀軌は入手できなかった。
- 16) 田中 (1990: 87-88)
- 17) ゲシェー・ソナム・ゲルツェン・ゴンタ (1996: 56-62)
- 18) 五つの枝を持った類似の樹木の観想は、ニンマ派の文献にも含まれる (田中 1990: 70-75)。
- 19) 1984年7月に筆者がカトマンドゥ市のゲルク派のチベット仏教寺院で実施した聞き取り調査にもとづく。
- 20) クンチョク・シタル他 (1995) の第2章による。
- 21) 「七種無上供養」はすでにインドの仏教徒たちが形式化した礼拝法である。その初出は『華嚴経』「入法界品」といわれ、インドの成就法を集成した『サーダナマラー』にも、いくつかの成就法にこの名称や具体的な礼拝法が登場する (清水 1977)。しかし、その中で行われている第二段階の供養は、インドで一般的に行われているプージャー、すなわち水や香、花などによるもので、マンダラ世界の献供は認められない。
- 22) マンダラ供の儀礼については Schubert (1954), Lessing (1956), Haahr (1958), Brauen (1997: 24-25) 参照。
- 23) 実際に日常的に行うツォクシンの観想では、マンダラは手の印契によって代用されることもある。その場合も、僧侶はスメール世界を捧げていることを観想しなければならない。
- 24) スメール山を中心としたマンダラを仏たちに捧げる儀礼は、ネパール仏教の代表的な儀礼「グルマンダラ・プージャー」におそらく関係する。ラマチューバの儀式では供物を諸尊、鬼神、土地神などにも分配し、この部分は「ツォー」と呼ばれるが、グルマンダラ・プージャーの場合、後半のバリ儀礼がこの部分に相当する。ツォーの儀軌はパンチェンラマー世の儀軌には含まれず、その師のひとりであるサンゲー・イエシェーが著したとされる儀軌が用いられている。グルマンダラ・プージャーについては氏家 (1974), 島 (1991a, 1991b), 吉崎 (1997), Gellner (1991, 1992) などによる研究がある。
- 25) Schmid (1964)。この他、セットの全体もしくは一部が加藤・松長 (1981: Pl. IV-15-27), 逸見 (1985: Nos. 695-706), Béguin (1991: Nos. 44-56) にも含まれる。

- 26) Jackson (1996: 234-243)
- 27) ポストン本のツォクシンがタシルンボ寺で制作されたことも、このことに関係するかもしれない。なお、パンチェンラマのタンカ・セットの第四番目のアバヤーカラグプタの像は、体に蛇を巻き付かせて描いたもの (e. g. Tucci 1949: Pl. L) と、アバヤーカラグプタのみを描いたものの二つのヴァージョンがある。ツォクシンのアバヤーカラグプタの姿は、このうちの蛇をとまわらないものと一致するが、現存するタンカ・セットのほとんどが蛇と一緒に描いている。
- 28) 「八十四成就者図像集」については Schmid (1958) 参照。
- 29) たとえば拙稿 (1998) の中で紹介したタンカや、河口慧海将来の作品 (東北大学東洋日本美術史研究室編 1986) においてみられる。
- 30) たとえば Tucci (1949: Pls. 183, 184)。
- 31) チベットの十六羅漢の研究は比較的豊富である。
- 32) たとえば Tucci (1949: Pls. 42, 76), 加藤・松長 (1981: Pl. II-19), 藤田 (1984: Pls. 13-18), Rhie & Thurman (1991: Pl. 4)。
- 33) たとえば Rhie & Thurman (1991: Pl. 4), Blyth-Hill (1997: 271)。
- 34) 白描本は Pander (1890), Grünwedel (1890), Oldenburg (1903), Lokesh Chandra (1964), Olschak (1973), 加藤・松長 (1981) があり、木版本は Lokesh Chandra (1986), 章嘉編 (1994) がある。
- 35) チベットにおける浄土観想法については小野田 (1983) 参照。
- 36) チベットのタンカの画面構成については、拙稿 (2000) 参照。
- 37) ただし説話図などにはこの原理は当てはまらない。
- 38) サマヴァサラナについては Balbir (1994), 矢島 (1996) 参照。
- 39) マンダラの表現方法については、すでに拙著 (1997) の第四章で述べた。

文献

- 氏家昭夫 1974 「ネパールの仏教儀礼の紹介——Gurumaṅḍalārcanapūjā について」『密教文化』97: 72-96。
- 小野田俊蔵 1983 「チベット所伝の浄土観修法——青木文教師将来資料 Nos. 103, 104, 107, 108, 109 についての管見」『青木文教師将来チベット民族資料目録(国立民族学博物館研究報告別冊 1号)』(長野泰彦編) pp. 184-192。
- 加藤敬・松長有慶 1981 『マンダラ』 毎日新聞社。
- クンチョク・シタル、ソナム・ギャルツェン・ゴンタ、斎藤保高 1995 『実践・チベット仏教入門』春秋社。
- ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ 1996 『チベット密教の瞑想法』金花舎。
- 島 岩 1991a 「仏教儀礼の受容と変容——ネパールの密教儀礼グルマンダラ供養」『仏教の受容と変容 第5巻チベット・ネパール編』立川武蔵編 佼成出版社、pp. 205-247。
- 清水 乞 1977 「インド宗教儀礼と造型——『サーダナ・マラー』を中心として」『日本仏教学会年報』43: 59-72。
- 章嘉・若必多吉 編 1994 『三百仏像集』中国蔵学出版社。
- 田中公明 1987 『曼荼羅イコロジー』 平河出版社。
- 田中公明 1990 『詳解河口慧海コレクション——チベット・ネパール仏教美術』佼成出版社。
- 田中公明 1993 『チベット密教』 春秋社。
- 田中公明 2001 『タンカの世界：チベット仏教美術入門』山川出版社。
- 東北大学東洋・日本美術史研究室編 1986 『東北大学所蔵 河口慧海請来チベット資料図録』佼成出版社。
- 梅尾祥瑞 1986 『チベット・ネパールの仏教絵画』臨川書店。
- 長野泰彦編 1983 『青木文教師将来チベット民族資料目録(国立民族学博物館研究報告別冊 1号)』

国立民族学博物館。

- 蓮見治雄編 1996 『モンゴル秘宝展——チンギス・ハーンと草原の記憶』日本経済新聞社
- 藤田弘基(写真)、田中公明(解説) 1984 『チベットの秘宝』ぎょうせい。
- 逸見梅栄 1935 『印度に於ける礼拝像の形式研究』東洋文庫。
- 逸見梅栄 1985 『中国喇嘛教美術大観』東京美術。
- 宮治 昭 1996 「トゥルファン・トヨク石窟の禅観窟壁画について——浄土図・浄土観想図・不浄観想図(下)」『仏教芸術』226:38-83。
- 森 雅秀 1997 『マンダラの密教儀礼』春秋社。
- 森 雅秀 1998 「『ツインマーマン・コレクション』の「ヴァジュラーヴァリー-四曼荼羅」——チベットにおけるマンダラ伝承の一事例」『美術史』145:34-81。
- 森 雅秀 2000 「解体されるマンダラ——タンカの画面構成に関する一考察——」『加藤純章博士還暦記念論集』春秋社、pp. 373-386。
- 矢島道彦 1996 「ジャイナ教のマンダラ——<聖なる集い>(samavasaraṇa)について」立川武蔵編『マンダラ宇宙論』法蔵館、pp. 87-117。
- 吉崎一美 1997 「Gurumṇḍala-pūjā とその造型」『密教文化』197:1-22。
- 李翼誠他篇 1984 『西藏仏教密宗芸術』北京外文出版社出版。
- リー、M.、R. サーマン監修 1997 『天空の秘宝 チベット密教美術展』朝日新聞社。
- Balbir, N. 1994 An Investigation of Textual sources on the samavasaraṇa("The Holy Assembly of the Jina"). *Festschrift, Klaus Bruhna zur Vollendung des 65. Lebensjahres*, pp.67-104.
- Béguin, G. 1991 *Tibet, Art et Meditation: Ascètes et Mystiques au Musée Guimet*. Paris: Editions Findakly.
- Blyth-Hill, V. 1997 The Conservation of Thankas. In: P. Pal. ed. *On the Path to Void: Buddhist Art of the Tibetan Realm*. Mumbai: Marg Publications, pp.270-281.
- Brauen, M. 1998 *The Mandala: Sacred Circle in Tibetan Buddhism*. tr by M. Willson. Boston: Shambala.
- Gellner, D. N. 1991 Ritualized Devotion, Altruism, and Meditation: The Offering of the *Guru Maṇḍala* in Newar Buddhism. *Indo Iranian Journal* 34:161-197.
- Gellner, D. N. 1992 *Monk, Householder and Tantric Priest: Newar Buddhism and Its Hierarchy of Ritual*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Getty, A. 1962(1914) *The Gods of Northern Buddhism*. Rutland: Charles E. Tuttle.
- Grünwedel, Albert 1890 *Veröffentlichungen aus dem Königen Museum für Völkerkunde*. Berlin.
- Haar, Erik 1958 Contribution to the Study of Maṇḍala and Mudrā. *Acta Orientalia* 23:58-91.
- Jackson, D. 1996 *A History of Tibetan Painting*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Jackson, David & Janice 1984 *Tibetan Thangka Painting: Methods & Materials*. London: Serindia Publications.
- Lauf, Detlef I. 1976 *Verborgene Botschaft Tibetischer Thangkas, Secret Revelation of Tibetan Thangkas*. Freriburg: Aurum Verlag.
- Lessing, F. D. 1956 Miscellaneous Lamaist Notes, I: Notes on the Thanksgiving Offering. *Central Asiatic Journal* 2:58-71.
- Lokesh Chandra 1964 *The Three Hundred Gods*. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- Lokesh Chandra 1986 *Buddhist Iconography of Tibet*. Kyoto: Rinsen.
- Oldenburg, S. F. 1903 *Sbornik Izobrazhenii 300 Burkhanov*. Bibliotheca Buddhica, vol.5.Petersburg.
- Olschak, R. C. & G. T. Wangyal 1973 *Mystic Art of Tibet*. New York: McGraw-Hill.
- Pal, P. ed. 1996 *On the Path to Void: Buddhist Art of the Tibetan Realm*. Mumbai: Marg Publications.
- Pan chen blo bzang chos kyi rgyal mtshan 1973 *Bla ma mchod pa'i cho ga*. Pan chen blo bzang chos kyi rgyal mtshan gsung 'bum, Vol.1.New Delhi, ff.777-797.
- Pander, Eugen 1890 *Das Pantheon des Tschangtscha Hutuktu*. Berlin: Verlag von W. Spemann.
- Rhie, Marylin M. & Robert A. F. Thurman 1991 *The Sacred Art of Tibet: Wisdom and Compassion*. London:

- Thames and Hudson.
- Schmid, T. 1958 *The Eighty-five Siddhas*. Reports from the Scientific Expedition to the North-Western Provinces of China under the Leadership of Dr. Sven Hedin. Stockholm : Statens Etnografiska Museum.
- Schmid, T. 1961 *Saviours of Mankind I : Dalai Lamas and Former Incarnations of Avalokiteśvara*. Stockholm : Statens Etnografiska Museum.
- Schmid, T. 1964 *Saviours of Mankind II : Panchen Lamas and Former Incarnations of Amitāyus*. Stockholm : Statens Etnografiska Museum.
- Shima, Iwao 1991 *A Newar Buddhist Temple Mantrasiddhi Mahāvihāra and a Photographic Presentation of Gurumandalapūjā*. Tokyo : ISLCAA.
- Schubert, Johannes 1954 *Das Reismankala. Ein Tibetischer Ritualtext, Herausgegeben, Übersetzt und Erläutert. Asiatica, Festschrift Friedrich Weller zum 65 Geburtstag*, pp.584—609.
- Tachikawa, M., M. Mori & S. Yamaguchi 1995 *Five Hundred Deities. Senri Ethnological Reports No.2 Senri* : National Museum of Ethnology.
- Tucci, G. 1949 *Tibetan Painted Scrolls*. Rome : La Libreria Dello Stato.

図版出典

- 図 1 榎尾(1986 : Pl. III 8-1) ; 図 2 Tucci(1949 : Fig.83) ; 図 3 Tucci(1949 : Fig 84) ; 図 4 Rhie & Thurman(1991 : Pl.154) ; 図 7 東北大学東洋日本美術史研究室編(1986 : p.130) ; 図 8 東北大学東洋日本美術史研究室編(1986 : p.131) ; 図 9 Tucci(1949 : Figs.94,95,100,102) ; 図 10 Rhie & Thurman(1991 : Pl.99) ; 図 11 Rhie & Thurman (1991 : Pl.3) ; 図 12 Rhie & Thurman(1991 : Pl.4) ; 図 13 長野編(1983 : Pl.8 a) ; 図 14 藤田(1984 : Pl.38)

付記

本稿は『宗教美術における視覚的イメージの機能と使用方法——仏教・キリスト教美術の比較研究』(平成12・13年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書・宮治昭代表、2002年)所収の同タイトルの拙稿(pp. 59-92)に加筆修正を行ったものである。また、本稿の一部は「集会樹の造型と儀礼」『印度学仏教学研究』第47巻第1号(1998年 pp. 194-200)としてもすでに発表している。

ボストン美術館所蔵ツォクシンの尊名・人名リスト

凡例

- ①通し番号、(1) サンスクリット名 (尊名の後の[]内の数字はグループ内の通し番号)
 (2) チベット名、(3) 参考図版等の順に記載。ただし、チベット人の場合、(1) のサ
 ンスクリット名はない。
 ②グループ名の前のアルファベットは図5に、各尊の前の通し番号は図6にそれぞれ対応
 する。
 ③尊名等が不明の場合は「?」のみを記載する。
 ④300は『三百尊図像集』[Lokesh Chandra 1980]、500は『五百尊図像集』[Tachikawa *et. al.*
 1996] を表し、これに続く番号はそれぞれの中で用いられている尊格の通し番号に対応す
 る。

A 釈迦	10	(2)Paṅ chen Blo bzang ye shes, Pan chen Lama II
0 (1)Śākyamuni		
(2)Shā kya thub pa		(3)Tucci 1949 : Fig.101
(3)300 no.2	11	(2)Paṅ chen Blo bzang dpal ldan ye shes, Pan chen Lama III
持金剛		(3)Tucci 1949 : Fig.103
1 (1)Vajradhara	12	(2)Sa skya Paṅ ḍi ta
(2)rDo rje 'chang		(3)Tucci 1949 : Pl.87, Fig.85
	13	(2)bSod nam phyogs blang?
		(3)Tucci 1949 : Fig.98 ; Béguin 1991 : No.54
B インド・チベットの祖師	14	(2)Chos kyi rdo rje
2 (1)Mañjuśrī		(3)Lokesh Chandra 1980 : no.1397
3 (1)Abhayākara Gupta	15	(1)?
(2)'Jigs med 'byung gnas sba pa	16	(1)?
(3)Tucci 1949 : Pl. L, p.413, Fig.93	17	(1)?
4 (2)Tsong kha pa		
(3)300 no.41 ; Lokesh Chandra 1980 : no.1394		
5 (2)Mkhas grub dGe legs dpal bzang po	C 密教の祖師	
(3)300 no.42, Lokesh Chandra 1980 ; no.1395 ; Tucci 1949 : Fig.97	18	(1)Vajrasattva
6 (2)rTa nag 'gos lo		(2)rDo rje sems dpa'
(3)Tucci 1949 : Fig.94	19	(1)Tailakapāda
7 (2)Paṅ chen Blo bzang chos kyi rgyal mtshan, Pan chen Lama I		(2)Ti lo pa
(3)Tucci 1949 : Fig.100		(3)Lokesh Chandra 1980 : no.1378 ; 300 no.17
8 (2)rDo rje 'dzin?	20	(1)Kṛṣṇacārin
(3)Tucci 1949 : Fig.101 (右上の人物)		(2)Nag po spyod
9 (2)dBen sa pa Blo bzang don grub		(3)Lokesh Chandra 1980 : no.1145 ; 300 no.15
(3)Tucci 1949 : Fig.99	21	(1)Ḍombīheruka
		(2)Ḍom bhi he ru ka
		(3)Lokesh Chandra 1980 : no.1104 ; 300 no.20

- 22 (1)Atīśa
(3)300 no.29
- D 甚深觀の祖師
- 23 (1)Mañjuśrī
- 24 (1)Nāgārjuna
(2)Klu grub
(3)300 no.5
- 25 (1)?
- 26 (1)Bhāvaviveka?
(2)Legs ldan zhabs
(3) Tucci 1949 : Fig . 92 ; Béguin 1991 :
Nos.47,48
- E 広大行の祖師
- 27 (1)Maitreya
(2)Byangs pa
(3)300 no.1
- 28 (1)Asaṅga
(2)Togs med
(3)300 no.6
- 29 (1)Vasubhandu?
(2)Byig gnyen
(3)300 no.7
- 30 (1)?
- F イダム (守護尊)
- 31 (1)Mahācakra (Vajrapāṇi)
(2)'Khol lo chen po
(3)300 no.64
- 32 (1)Raktayamāri
(2)gShin rje gshed dmar po
(3)300 no.72
- 33 (1)Kṛṣṇayamāri
(2)gShin rje gshed dgra nag
(3)300 no.71
- 34 (1)Kālacakra
(2)Dus kyi 'khor lo
(3)300 no.65
- 35 (1)Vajrabhairava
(2)rDo rje 'jigs byed
(3)300 no.61
- 36 (1)Guhyasamāja
(2)gSang ba 'dus pa
(3)300 no.62
- 37 (1)Cakrasaṃvara
(2)'Khor lo sdom pa
(3)300 no.63
- 38 (1)Hevajra
(2)Kyai rdo rje
(3)300 no.66
- 39 (1)?
- G 仏・菩薩
- 40 (1)Sarvavid Vairocana
(2)Kun rigs(rNam snang)
(3)300 no.76
- 41 (1)?
- 42 (1)?
- 43 (2)rGyal mchog rin chen
(3)300 no.79
- 44 (1)Durgatipariśodhana
(2)Ngan song sbyongs rgyal
(3)300 no.78
- 45 (1)?
- 46 (1)Vairocana-abhisambodhi
(2)rNam snang ngon byang
(3)300 no.83
- 47 (1)?
- 48 (1)Trisamaya vyūhamuni
(2)Thub pa Dam thig gsum bkod
(3)300 no.86
- 49 (1)?
- 50 (1)Amitāyus
(2)rGyal ba Tshe dpag med
(3)300 no.85
- 51 (1)?
- 52 (1)?
- 53 (1)?
- H 三十五懺悔仏
- 54 (1)Śākyamuni[1]
(2)Śākya thub pa
(3)300 no.97
- 55 (1)Vajrapramardin[2]
(2)rDo rje snying po
(3)300 no.98
- 56 (1)Ratnārcis[3]
(2)Rin chen 'od 'phro
(3)300 no.99

- 57 (1)Nāgeśvararāja[4]
(2)Klu dbang gi rgyal po
(3)300 no.100
- 58 (1)Virasena[5]
(2)dPa' bo, i sde
(3)300 no.101
- 59 (1)Viranandin[6]
(2)dPas dgyes
(3)300 no.102
- 60 (1)Ratnaśrī/Ratnāgni[7]
(2)Rin chen me
(3)300 no.103
- 61 (1)Ratnacandraprabha[8]
(2)Rin chen zla 'od
(3)300 no.104
- 62 (1)Amoghadarśin[9]
(2)mThong ba don yod
(3)300 no.106
- 63 (1)Ratnacandra[10]
(2)Rin chen zla ba
(3)300 no.105
- 64 (1)Nirmala[11]
(2)Dri ma med pa
(3)300 no.107
- 65 (1)Śuradatta[12]
(2)dPas sbyin
(3)300 no.108
- 66 (1)Brahman[13]
(2)Tsangs pa
(3)300 no.109
- 67 (1)Brahmadatta[14]
(2)Tshangs pas byin
(3)300 no.110
- 68 (1)Varuṇa[15]
(2)Chu lha
(3)300 no.111
- 69 (1)Varuṇadeva[16]
(2)Chu lha'i lha dkar
(3)300 no.112
- 70 (1)Bhadraśrī[17]
(2)dPal bzangs ser po
(3)300 no.113
- 71 (1)Candarnaśrī[18]
(2)Tsa nda na dpal
(3)300 no.114
- 72 (1)Anantauijas[19]
(2)gZi brjid mtha' yas
(3)300 no.115
- 73 (1)Prabhāsaśrī[20]
(2)'Od dpal
(3)300 no.116
- 74 (1)Aśokaśrī[21]
(2)Mya ngan med pa'i dpal
(3)300 no.117
- 75 (1)Nārāyana[22]
(2)Sred med kyi bu
(3)300 no.118
- 76 (1)Kusumaśrī[23]
(2)Me tog dpal
(3)300 no.119
- 77 (1)Brahmajyotirvikrīḍitā-bhijña[24]
(2)Tshangs pa'i 'od zer
(3)300 no.120
- 78 (1)Padmajyotirvikrīḍitā-bhijña[25]
(2)Pad ma'i 'od zer
(3)300 no.121
- 79 (1)Dhanaśrī[26]
(2)Nor dpal
(3)300 no.122
- 80 (1)Smṛtiśrī[27]
(2)Dran pa'i dpal
(3)300 no.123
- 81 (1)Suprakīrtitanāmadheyaśrī[28]
(2)mTshan dpal shin tu yong grags
(3)300 no.124
- 82 (1)Indraketuḍhvaja[29]
(2)dBang po tog gi rgyal mtshan
(3)300 no.125
- 83 (1)Suvikrāntaśrī[30]
(2)Shin tu rnam par gnon pa
(3)300 no.126
- 84 (1)Vicitrasaṃkrama / Vijitasamgrāma[31]
(2)g ; Yun las shin tu rnam par rgyal ba
(3)300 no.127
- 85 (1)Vikrāntagāmin[32]
(2)rNam par gnon pas gshegs pa
(3)300 no.128
- 86 (1)Samantāvabhāsavyūhaśrī[33]
(2)Kun nas snang ba bkod pa
(3)300 no.129

- 87 (1)Ratnapadmavikrāmin[34]
(2)Rin chen pad mas rnam par gnon pa
(3)300 no.130
- 88 (1)Ratnapadmasupratīṣṭhitaśailendrarāja[35]
(2)Ri dbang gi rgyal pa
(3)300 no.131
- 89 (1)?
- I 十六羅漢
- 90 (1)Aṅgaja[1]
(2)Yan lag 'byung
(3)300 no.193 ; 500 no.17 ; Tucci 1949 PI 156
- 91 (1)Ajita[2]
(2)Ma pham pa
(3)300 no.194 ; 500 no.18 ; Tucci 1949 PI 157
- 92 (1)Vanavāsīn[3]
(2)Nags na gnas
(3)300 no.195 ; 500 no.19 ; Tucci 1949 PI 158
- 93 (1)Kālīka[4]
(2)Dus ldan
(3)300 no.196 ; 500 no.20 ; Tucci 1949 PI 159
- 94 (1)Vajrīputra[5]
(2)rDo rje mo ; i bu
(3)300 no.197 ; 500 no.21 ; Tucci 1949 PI 160
- 95 (1)Bhadra[6]
(2)bZang po
(3)300 no.198 ; 500 no.22 ; Tucci 1949 PI 161
- 96 (1)Kanakavatsa[7]
(2)gSer be'u
(3)300 no.199 ; 500 no.23 ; Tucci 1949 PI Q
- 97 (1)Kanakabharadvāja[8]
(2)Bha ra dhva dza
(3)300 no.200 ; 500 no.24 ; Tucci 1949 PI 162
- 98 (1)Nakula / Bakula[9]
(2)Baku la
(3)300 no.201 ; 500 no.25 ; Tucci 1949 PI 163
- 99 (1)Rāhula[10]
(2)sGra gcan
(3)300 no.202 ; 500 no.26 ; Tucci 1949 PI 164
- 100 (1)Cūḍapanthaka[11]
(2)Lam phran brtan
(3)300 no.203 ; 500 no.27 ; Tucci 1949 PI 165
- 101 (1)Piṇḍolabharadvāja[12]
(2)Bhara dhva dza bsod snyoms len
(3)300 no.204 ; 500 no.28 ; Tucci 1949 PI 166
- 102 (1)Panthaka[13]
(2)Lam brtan
(3)300 no.205 ; 500 no.29 ; Tucci 1949 PI 167
- 103 (1)Nāgasena[14]
(2)Klu, i sde
(3)300 no.206 ; 500 no.30 ; Tucci 1949 PI 168
- 104 (1)Jīvaka[15]
(2)sBed byed
(3)300 no.207 ; 500 no.31 ; Tucci 1949 PI 169
- 105 (1)Subinda / Abheda[16]
(2)Mi phyed pa
(3)300 no.208 ; 500 no.32 ; Tucci 1949 PI 170
- 106 (1)Dharmatāla Upāsaka[17]
(2)dGe bsnen chen po Dharma tā
(3)300 no.209 ; 500 no.33
- 107 (1)Mahāyāna[18]
(2)Hwa shang
(3)300 no.210 ; 500 no.34
- J 護法尊
- 108 (1)Mahākāla
(2)mGon po phyag drug
(3)300 no.230
- 109 (1)Yama
(2)Shin rje
(3)300 no.238 (Chos rgyal phyi sgrub)
- 110 (1)Śukra-Tārā
(2)sGrol dmar
(3)300 no.160
- 111 (1)Śrīdevī
(2)dPal ldan lha mo
(3)300 no.232
- 112 (1)Krodha-Acala
(2)Khro bo mi g'yo ba
(3)300 no.174
- 113 (1)Mahākāla?
(2)mGon dkar yid bzhin nor bu
(3)300 no.229
- 114 (1)Vaiśravaṇa
(2)rNam sras gser chen
(3)300 no.263
- 115 (1)Śyāma-Tārā (Khadiravanī-Tārā)
(2)Sen lding nags sgröl
(3)300 no.161
- 116 (1)

- (2)Be kce (3)300 nos.292-300
 (3)300 no.254
 117 (1)Sitātaptra
 (2)'Phags ma gdungs dkar
 (3)300 no.162
 118 (1)?
 119 (1)?
 120 (1)Avalokiteśvara?
 121 (1)Mahāpratisarā
 (2)So sor 'brang ma
 (3)300 no.176
 122 (1)Uṣṇīṣavijayā
 (2)gTsug tor rnam par rgyal ma
 (3)300 no.164

K 四天王

- 123 (1)Dhṛtarāṣṭra
 (2)Yul 'khor bsrung
 (3)300 no.281 ; 500 no.35
 124 (1)Virūḍhaka
 (2)'Phags skyes po
 (3)300 no.282 ; 500 no.36
 125 (1)Virūpākṣa
 (2)Mig mi bzang
 (3)300 no.284 ; 500 no.37
 126 (1)Vaiśravaṇa
 (2)rNam thos sras
 (3)300 no.285 ; 500 no.38

L 梵天・帝釈天など

- 127 (1)Brahman
 (2)Tshangs pa
 (3)300 no.278
 128 (1)Indra
 (2)brGya byin
 (3)300 no.277
 129 (1)Nanda
 (2)Klu rgyal dga' bo
 (3)300 no.286
 130 (1)Upananda
 (2)Klu rgyal nye dga'
 (3)300 no.288

M 七宝・八吉祥

- 番外 (1)Saptaratna, Aṣṭamaṅgala



図1 ツォクシン (ボストン美術館所蔵)



図2 ツォクシン部分 (所蔵不明)

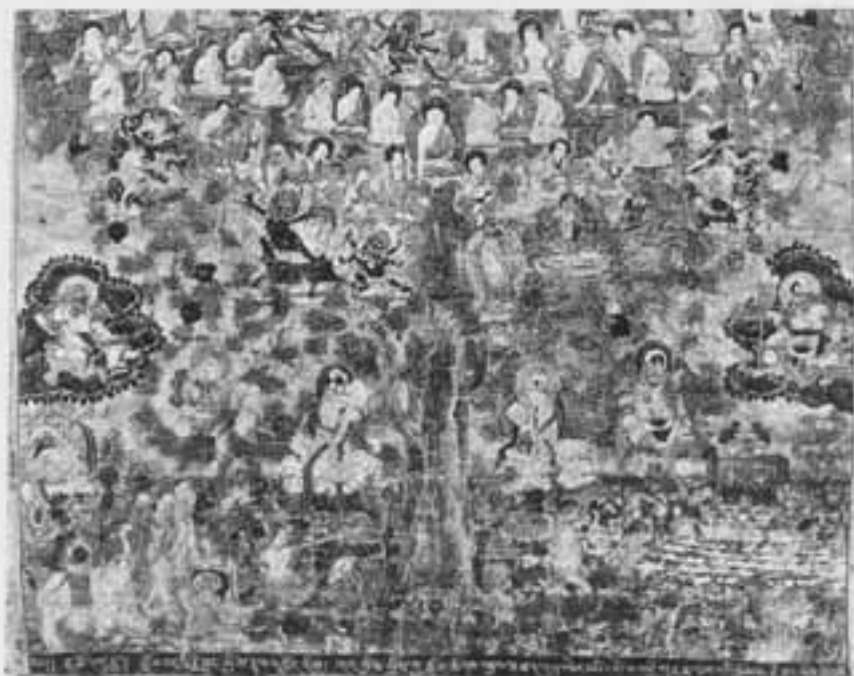
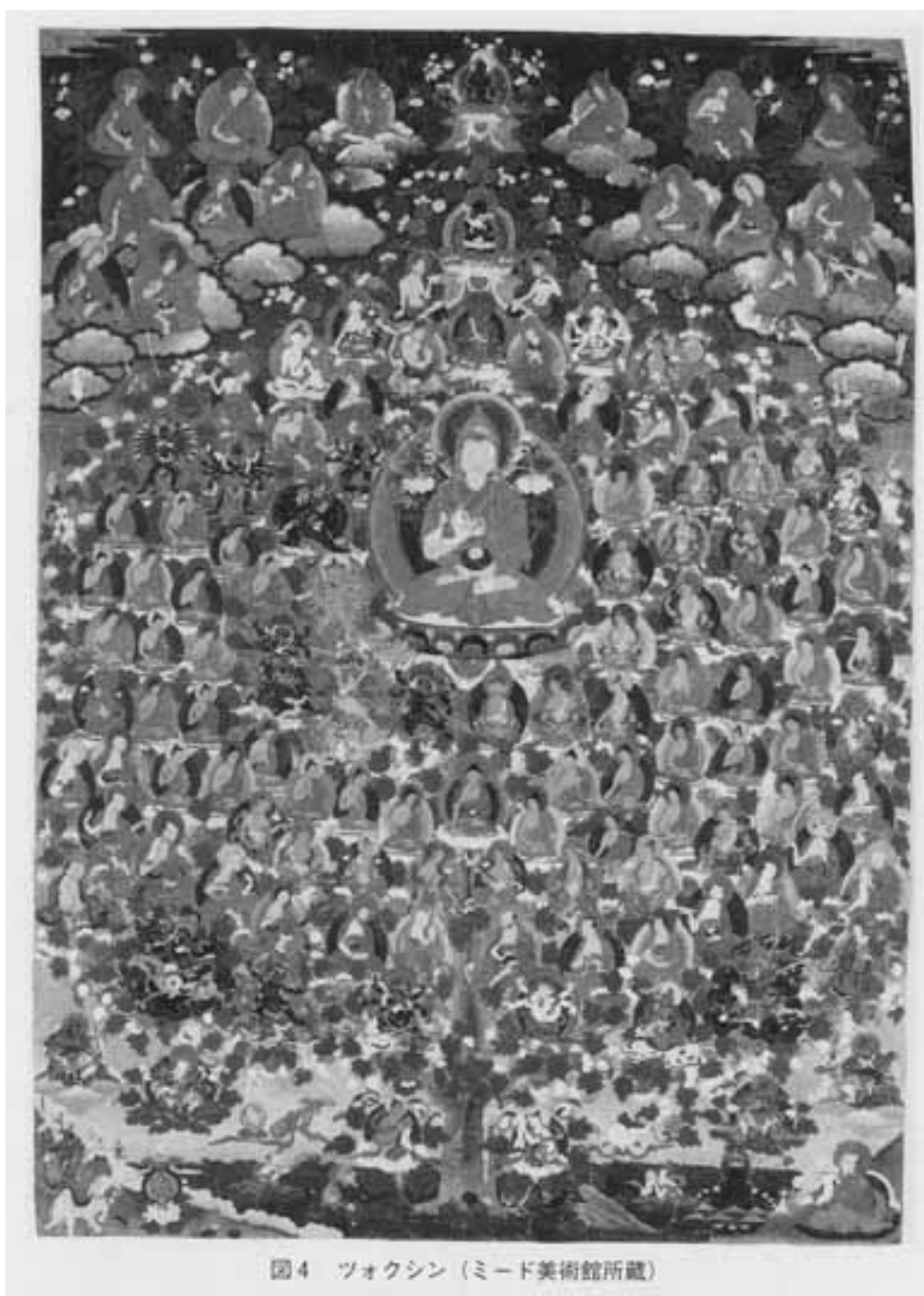


図3 ツォクシン部分 (所蔵不明)



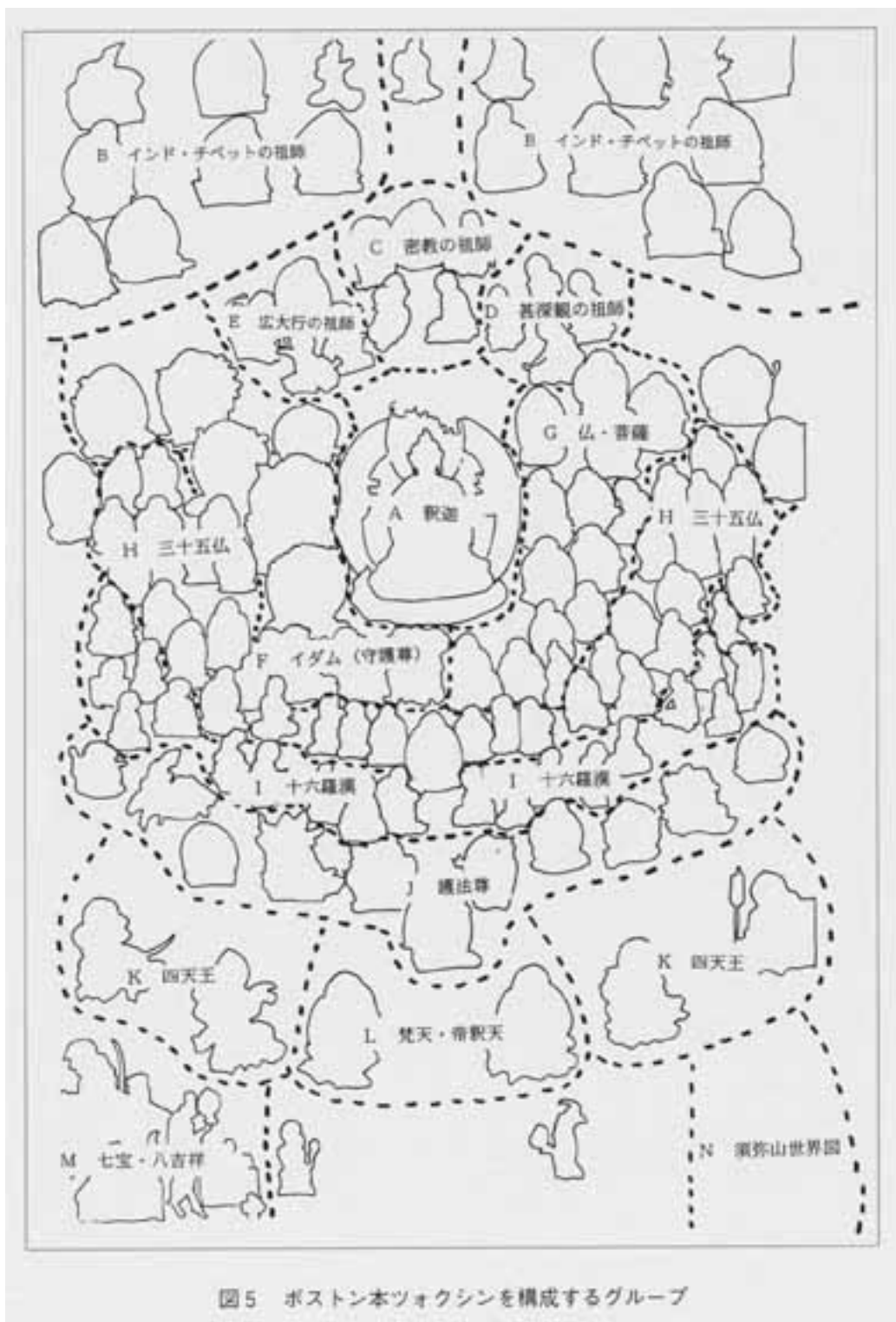


図5 ホストン本ツォクシンを構成するグループ

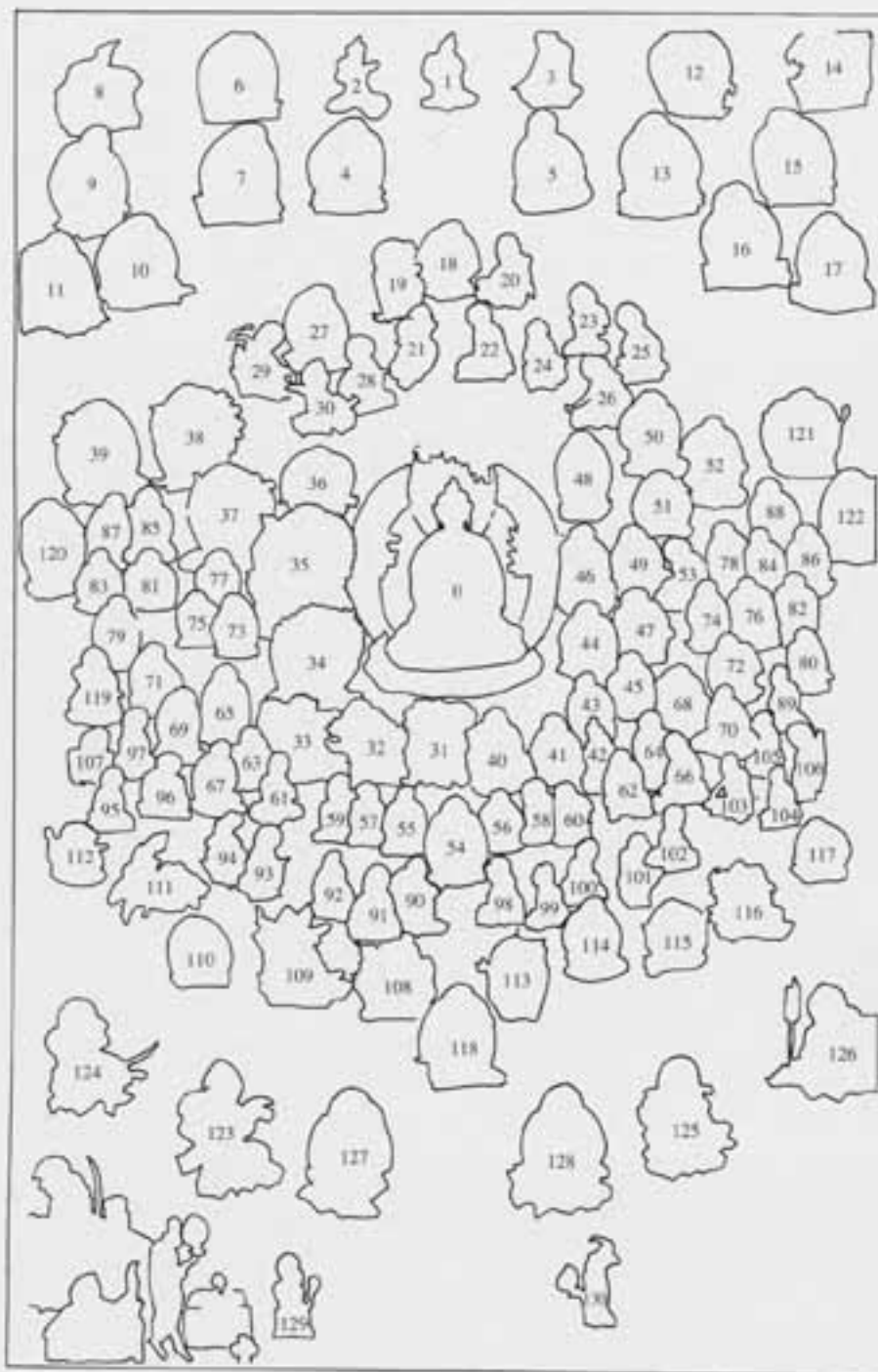


図6 ポストン本ツォクシンの尊格等の配置図



図7 ラムリムのツォクシン（東北大学所蔵）



図8 ラマチューバのツォクシン（東北大学所蔵）



図9 歴代バンチェンラマのタンカ・セットの一部



図10 バンチェンラマ四世とその前生者たち（アメリカ自然史博物館所蔵）



図11 釈迦と十六羅漢（大英博物館所蔵）



図12 釈迦と三十五仏、十六羅漢（ヴァージニア美術館所蔵）



図13 チベットの浄土園 (大阪・国立民族学博物館所蔵)



図14 サンヴァラと諸尊図 (ダライラマ御物)